

# 中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

## 九州で目いっぱい楽しんできました その2

天逆鉾を写真に収め、無人の山小屋の中を覗いてから下山。15時58分に駐車場に戻ってきた。そのまま、近くの温泉に入り、汗を流してから竹田市直入町まで戻り、県ヶ丘高校の面々と合流。彼らの宿泊している温泉つきバンガローに泊めてもらうことにした。

29日は、再び県ヶ丘高校のメンバーと行動を共にし、赤川温泉から西登山道を辿り、久住山に登った。いくつかのインターハイ参加校が下見に入っており、山頂は賑やかだったが、この日も眺望はなし。稜線上は風も強く、寒い。広い尾根筋は方向感覚を失わせるので、地図とコンパスで方向をあわせ、黄色いペンキを見失わないように慎重に歩いた。総体コースを精査して歩く県ヶ丘の生徒たちとは久住山の先の空池の分岐で分かれ、僕は単独天狗ヶ城、中岳へと向かった。九州本土最高峰の中岳の山頂には僕が到着した時には誰もいなかった。その後、稲星山を經由して神明水から黒土で滑りやすい南登山道を下山し、最後は赤川温泉へ戻った。九州本土最高峰を含む1700m台の4峰を極めた1日だった。

30日、総体役員としては夕刻までに役員宿舎入りが義務づけられている日である。つまり裏を返せば、夕刻まで自由に時間を使えるということでもある。一通り下見を終えた県ヶ丘の生徒たちは阿蘇に登りたいという。その生徒たちをさらに焚きつけて祖母山、阿蘇山の2山に登ろうと画策。

まずは祖母山に登ろうと、6時35分に神原登山口を出発。くじゅう連山と同じ竹田市の山であるが、山頂まで原生林に覆われた祖母山の印象は全く異なって感じられた。祖母、傾山系では九州では絶滅されたと言われる熊の目撃情報が時折あるというのも頷けるような美しく豊かな森が広がっていた。登山口から溪流沿いの林をしばらく進むと、五合目には立派な避難小屋があった。尾根筋は笹の葉がすべてついていなかったので、花が咲き実をつけて枯れたのかと思っていたが、総体のおり大分県岳連会長の後藤さんに聞くと、鹿に食い尽くされてしまったとのことだった。そんな祖母山だったが、1200m位から上部は前日までと同様、ガスの中。頂上には9時前に到着。眺望こそなかったが祖母山の良さを十分感じることもできる登山だった。しかし、とにかくずっと天気が悪い上に、この時期の九州の山としては想定外の寒さには驚いた。

11時、この時間からならまだ十分阿蘇山に登るのは可能だろうと、阿蘇山の中岳、高岳の登山口である仙酔峡まで移動する。ロープウェイはすでに営業をしておらず、やや寂れた感のある登山口である。阿蘇もやはり頂上付近は雲に覆われている。この天気松田さんは「前回登った時のいい思い出を壊したくないから・・・。」と登山口待機するという。肯なるかなと、無線番をお願いし、12時20分にまずは高岳に向かって歩き出す。標高差およそ700m、元気な若者たちは途中一本も取らず、一気に登りあげ1時間半でお鉢の上に抜けた。やはりガスは濃く、眺望はない。雄大な阿蘇火山の雰囲気を感じたかったのだが、とにかくここ数日の天気は安定しない。山陰や北陸地方では梅雨前

線が南下し今まで経験したことのないような雨が降っているとのニュースも流れている。その前線に向かって吹き込む風がおそらくこの天気をもたらしているのだろう。一休みした後、中岳に向かう。風がかなり強い。中岳の山頂ではさらにバタバタと大粒の雨も降って来た。火山性のガスも少し上がってきている。ロープウェイの山頂駅を回り、下山する。その山頂駅は荒廃し窓ガラスが割られ、無残な姿をさらしていた。ここからの下山路は基本舗装された完全な遊歩道。山に来てこういう道は却って疲れる。2つ目の山ともなれば尚更である。15時20分、登山行動終了。

これで、九州の山は終わるつもりだった。ところが、大会中に大分県高体連OBで今は大分岳連の会長をなさっている後藤利雄さんから、ご自身が作成に関わった「祖母傾山系」と「由布・鶴見岳」の2枚の地図をいただいた。それを眺めているうちに、どうしても登りたくなってきた。そんなわけで、6日閉会式後、竹田市内を観光した後、夕刻に傾山の登山口である九折に移動し、翌日に備えた。登山コースは、大分県の専門委員長の赤嶺さんのアドバイスをいただき、三ツ尾から二つ坊主を経て傾山頂へ至り、帰路は九折越を下るという周回コースとした。

登山口は標高400m弱、暑くて寝られなかったが、早朝4時半にヘッドランプの灯りを頼りに登り出す。登山道はピンクのテープで道が示されているが、慌てる乞食は貰いが少ないの警への通り、朝まだきの暗い中、沢の中で2回ほど道をロスト。少し時間をロスした。二つ坊主コースへの分岐である三ツ尾には6時30分着。ここから先、登山口には難路・健脚向きと記載され、ほかの登山道が実線表示であるのに、このコースだけは破線表示であった。実際はどうってことない道だったが、途中連続する岩場を展望しながら、3級程度の岩場が1ピッチあった。7時50分、山頂に到着。九州に来て、大船山以来久しぶりに360度の展望を望むことができた。山頂の手前で昨日九折越の小屋に泊まったという登山者が一人、「昼の九折発のバスに間に合うように下る」と言って、いそいそと下って行った。祖母、傾をこの時期に訪れる人は少ないようだ。それだけに原生林の中静かな山旅が楽しめ、好印象が残った。下山は九折越まで稜線を徐々に下り、そこからは登山口である九折まで、一気に下った。登山口到着は10時5分。

九州最後の山、由布山に向けて車を走らせる。湯布院の町から見上げると、上部が雲に隠れている。豊後富士の名に恥じない裾野の広い山だ。正面登山道の駐車場に車を止め、12時30分に歩きはじめる。暫く進むと、岐阜県飛騨神岡高校の女子チームが降りてきた。「上はガスっていて残念でした。」と顧問の中村さん。最後の登山もやはり雲の中か、とあまり期待せずに最後の山へと歩を進める。比較的気軽に登れる名山だからだろう、登山者は多い。合野越を過ぎると、1370m地点までは大きく九十九折れにつくられた登山道をゆっくりゆっくり上っていく。気が付けば麓では小富士よろしく由布岳の左手にあった飯盛城がはるか下に見える。仰げば、山頂を覆っていた雲はいつの間にか去り、双耳峰の西ノ岳と東ノ岳がマタエを挟んで猫の耳のように聳えたっている。やがて、九十九折れが終わるとマタエへ向かってまっすぐに登っていく。さすがに傾山を登ったあとだけにこの登りは堪えた。南面の登山道、雲が切れ太陽に照らされるだけに暑さも一入だ。13時50分西ノ岳到着。最後の山は笑って迎えてくれた。願わくは下山は東ノ岳にも登り、そこから日向岳を経由するコースをと思ったが、気力も時間ももう使い果たした。あとは一気に下り15時30分に登山終了とした。湯布院でゆったりと温泉に浸かり、夜通し車を飛ばして(約1000km)帰宅したのは明朝7時だった。